

「野山を歩く 健康を求めて」→ 手探りのまちづくり技術・・・AR「る」

私はこの12年間ほど岸和田市に景観審議会に関わっているが、最近、景観、観光、防災などの行政分野でAR（Augmented Reality：拡張現実）をどう使うか、検討を始めている。

これは、ARアプリケーションを入れたスマホやタブレットのカメラをマーカーにかざしたり、GISの位置情報により、今いる現実の場に関して、画面上に様々な動画などの情報を見せる技術である。今後急速に発展し、社会のいろいろな場面で使われるようになるだろうと予測されている。

わかりやすく言うと、ポケモンGOのようなもの。現実の街を歩きながら、画面上のその場所の地図にいろいろなポケモンが現れる、ボールを投げてポケモンをゲットする。ボールの投げ方にコツがある。ゲットしたポケモンの数で、自分のレベルが上がり・・・おっと横道に逸れた。しかし、ポケモンがたくさん現れる場所に人が多く集まり、賑わい、ちょっとしたまち起こしになるとか、逆に歩きスマホによる事故が多発するといったマイナスも起こり、注意を喚起する駅ホームのアナウンスが流れている。無視できない社会現象となったことは記憶に新しい。

大阪歴史博物館では、なんとAR難波宮（なにわのみや）というサービスを提供している。公式サイト「ご利用ガイド」によれば、「古代の宮都・難波宮」について、「AR技術を活用して」分かりやすく紹介するため、「在りし日の難波宮の姿」を現在の遺跡の上に重ねて画像で復元することによって、普通では想像できない「古代のようすを視覚的に理解でき、現在と過去との結びつきが実感」できるといっている。

少なくない行政が、広報、観光などに使い始めているが、維持管理、更新が大変そうで、まだ手探りの段階。

それ以外の事例として興味深いのは、あるイベントの時限定で使うとか、SEが名刺にマーカーを付ける、ポッキーが期間限定で商品にマーカーをつけたということも聞いたことがある。



図 AR 難波宮ご利用ガイド:大阪歴史博物館公式サイトより

岸和田で、ここに残る景観資源発掘プロジェクトをやってきた。今年で7年目になる。ここに残る樹木では桜や紅葉などがある。その木の揭示にかざすと、一番良い季節の、例えば満開の桜や、紅葉真っ盛りなどの画像、動画が出てくる。なんてことを考えている。



写真 岸和田流木墓園の満開の桜:市公式サイトより

また紀州街道沿いの町家の前で、説明板のマーカーにかざすと、その建物の昔の写真や、間取り、デザイン、歴史などの解説が出てくる。英語、韓国語、中国語なども。だんじりの時の道路の雰囲気も動画であると良い。

紀州街道の辺りは、海拔2～3m。津波が来たら、ここはどうなるか知らせるCGも効果的だろう。

未だ手探りだが、色々な可能性を持っている技術AR。一度機構でも検討しては如何でしょう。

(集合住宅維持管理機構理事・大阪市立大学 藤田忍)

※次回のタイトルは、「る」から始まることばです。